

2006. 11. 28

No.142

編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.
plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740-7-56535
(6号分1,000円)



今年も残りわずかになりました

10日ほど前に初雪が降りましたが、雪はすっかり消えて冬が足踏みしています。皆さんはお元気で過ごしてましたか？

10月に、所属する山岳会の自然保護全国集会で鳥取県の大山に行ってきました。それからずいぶん時間がたったような気がします。1ヶ月以上も山に登っていなかったことに気がつきました。そのおかげで、写真展や文学展、音楽会、映画と文化の秋（晩秋ですが）を楽しめました。釧路に日帰りですが、JR列車に乗って、水越武展を観てきました。別のページで紹介しましたので読んでいただけたら嬉しいです。

イラク戦争に反対の立場で、メールマガジンでコラムを書き続けた池澤夏樹さんのちょっと変わった「池澤夏樹のトポス（場所、土地）－旅する作家と世界の出会い－」展を観てきました。ストーリーを考える時、風景が先にあり、人が登場して話が始まるという。池澤さんの写真は、つなげるとひとつの物語になっているような気がしました。たくさんの本も展示されていましたが、直筆の文章はごく一部で、多くは、アフリカ、ネパール、イラクなど池澤さんが旅して撮影した風景写真でした。「風景に動かされて、啓発されて、何かを考えるということをやっとしてきた」という池澤さんの文章はとても明快で、心にすんと落ちて好きです。といってもそれほどたくさんの作品を読んではいないのですが、知里幸恵記念館建設委員会の発起人代表でもあります。この冬は、池澤さんのルーツをたどった「静かな大地」をじっくり読んで見ようかなと思いました。

一生懸命に山に登った1年でした。厳しい山に登るには、体力が必要です。みなさんはどんな工夫をしているのでしょうか？教えていただけたらと思います。

山だけでなく、平和や自然を守るために、ささやかでも行動できる勇気を持ちたいと思います。そんな活動も伝えていけるよう努力したいです。

来年もご愛読いただけたら幸いです。



朝日に映える三段山



八つ手岩をバックに

厳かに輝いていた上ホロカメットク山

今年初めての冬山は、上ホロカメットク山での雪上訓練で、11月25日と26日に行われました。Nリーダーを中心に15人が参加しました。

私は、スノーシューで参加。十勝岳温泉、凌雲閣前の駐車場を10時に出発し、途中で、シーデポ後、上ホロの旧噴火口周辺でピッケルワークやロープワーク、スタンディング・アックスビレイなどの練習をしました。確保しているとはいえ、急斜面に飛び込むのは勇気が要ります。泳ぎの要領がわからないので、私の場合はお尻からどすんという感じです。

寒さに震えながら、急斜面を安全に降り、ロープも回収する方法を学びました。

翌日は快晴。宿泊した白銀荘から、富良野岳がそびえていました。前日と同じ場所にシーデポして、アイゼンをつけ、ピッケルを持ち、急斜面を直登して、上ホロカメットクを目指します。買ったばかりのアイゼンはしっかり効きます。深雪では、抜き足、差し足。せっかくのトレースを壊して、叱られることしきりでした。

分水嶺踏査登山からすでに8ヶ月。すっかり、あの頃の気迫がなくなったように体が重く、そのうえ緊張で咽喉がからからになりながら、なんとか上富良野岳にたどりつきました。アイゼン歩行がスムーズにいかず難しかったです。白く輝く上ホロカメットク山が美しく荘厳。登った甲斐がありました。急斜面の長い長い下山は慎重に。山は奥が深いなあと改めて思いました。

夏山があり、沢、岩、冬山とさまざまな技術をマスターするには、かなりの努力が必要です。その上体力は鍛えなくてはどんどん落ちていきます。私より年配の仲間が頑張れる体力に圧倒されました。

こんなに苦しいことを何故続けるのかなと思うけど空に向かって登っていく、自然との一体感がなんとも

気持ちがいいです。その中に身を置いて眺める山の素晴らしさは、登らなくては味わえないものだと思います。やっぱり、鍛えなくちゃー、ね！



ハチドリの一としずく

11月14日に「ハイダ族とアイヌ民族のアートから」という講演と音楽の夕べがフェアートレード雑貨&レストラン「みんたる」でありました。

小さなレストランは、たくさんの人でぎっしり。カナダの先住民族ハイダの芸術家、マイケル・ニコル・ヤグラナスさんが講演しました。



ハイダグアイという小さな島で、巨大企業による森林伐採を止めさせたお話。ハチドリの一としずくのように、小さくても力を出し合うことの大切さを伝えてくれました。森林を守るためにたった2000人の島の人たちのパワーが伐採を止めたのです。

ハチドリの一としずくを描いたマイケルさんは、ハチドリが燃える森に落とした一滴の水は、伝統文化や、その基盤である環境を守るためのもの。自分の巣だけでなく森という社会や経済全体も守ろうとしていること。そして、自らが行動することの大切さを伝えていてと語りました。

アイヌ民族の結城幸司さんも、版画家として活動すると同時に、歌や踊りなどアイヌ文化の伝承に取り組み活動

しています。音楽はゆったりとしてどこか懐かしい。そこに小野有五さんも加わり、深刻化する地球温暖化に自分たちができることを考えるきっかけになりました。

水越 武 写真展「大地への想い」

弟子屈町に在住の写真家、水越武さん(68歳)の写真展「大地への想い」が、9月16日から11月15日まで道立釧路芸術館で開催されました。

水越さんは、愛知県豊橋市に生まれ、幼い頃から、南アルプスの山々に親しみ、早くから山にすべてを賭けるような生き方をしてきたことがき

つたであらう、ヒマラヤの山の間からいくつもの光が空に伸びている、幻想的な「日の出」が、一番最初に迎えてくれました。

氷点下15度の凜とした空気の中で、宇宙空間を光が貫いていくように感じた

地球の無限の表情を表現

水越さんは語っています。生命の誕生を思わせる荘厳な写真に感動しました。

知床の写真では、赤々と燃えるような朝日が昇るころ、流水にとまっているオオウシが、すさまじい地吹雪にじつと耐えている勇姿

が捉えられていて、水越さんもオオウシと一体になって、寒風にさらされている姿が伝わってきました。

屋久島や、白神山地など各地の森林をとらえた「森林列島」で98年、土門拳賞を受賞しています。

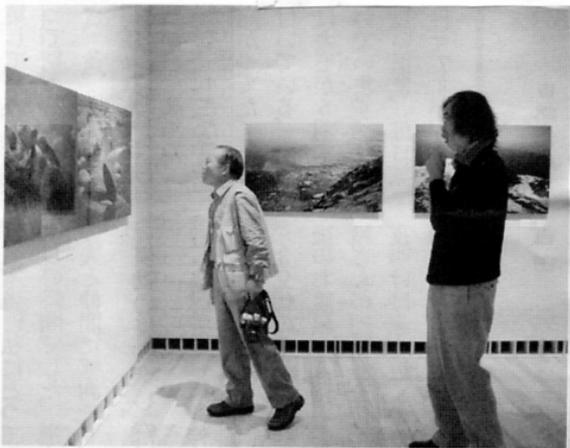
を持ち、多様性に富んだ不思議な生きものを抱え込んでいることか」と記しています。

自然と謙虚に向き合い、自然の作り出す美しさを表現していて、地球の生態系を破壊してはならないことを作品を通して語りかけて

写真展図録に水越さんは「遠くには地平線があり、高くには山があつた。地球はなんと美しく、無限の表情

水越さんの案内で写真の解説をしていたとき、感激もひとしおでした。

(樋口 みな子)



水越武さん(上の写真の右)は、『日本の原生林』『HIMARAYA』『雷鳥』『熱帯雨林BORNEO』などの写真集・著書があります。現在は弟子屈町の屈斜路湖畔に暮らし、山と自然を撮り続けています。

鳥取の大山に行ってきました。

自然保護全国集會に参加

10月21日、22日と鳥取県大山町で開催された日本山岳会自然保護全国集會に参加してきました。全国から100人近くの会員が集いました。

地元からの事例報告は、「大山頂上の植生復元について」と題して、1985年から始まった一木一石運動についてスライドを使っ
ての報告がありました。大山を愛する人たちが大山を支えていることが伝わってくるお話でした。



続いて、広島、北海道、岩手、信濃、東海、関西、山陰の7つの支部から自然保護活動が紹介され、全国各地の山岳を取り巻く問題点が、理解できました。

午後は、グループ討議に入り、高山植物、山のトイレ、登山道、商業登山、適正利用の5つのグループに14～5人ずつ分かれて、3時間にわたり熱心な討議が行われました。

私は高山植物部会の部会長として、不慣れなコーディネーターを務め、各支部からの意見をまとめました。はじめにパワーポイントを使って、北海道の高山植物が盗掘で荒らされて北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会ができたいきさつや、北海道支部が果たしてきた役割などを説明しました。活発な意見交換ができ、私たちのグループは「インターネットやメディアを活用して広く多くの人たちに、高山植物の大切さを訴えるよう、日本山岳会として考えていく」など5つの提案をまとめました。

どのグループでも山の自然を守るには、教育。啓発活動の大切さが一致した意見でした。夕方までの真摯な討論は、これからの自然保護委員会の方向が見えてとても有意義でした。会場を変えての懇親会は、素晴らしい民謡や安来節などで楽しみました。

翌日は大山山頂登山と、花回廊巡りのコースに分かれました。

素晴らしい快晴に恵まれ、私は大山頂上に向かいます。登山道は登山口から頂上までほとんど木製の階段や板で整備されて、いかにもろい地層であるかを実感しました。北海道のアポイ岳の花の最盛期と同じように、老若男女たくさんの登山者が登っていました。歩きにくい階段を登っていくと、ぶなの森が目にはやさしく迎えてくれ、登りのきつさを緩和してくれました。

5合目を過ぎてから青い日本海が眼下に現れ、美しい。厳しい北壁を眺め、天然記念物のダイセンキョロボク群生を見ながら、木道を通って頂上に8時半。登山口から2時間半でした。

大雪山系では雪が降り、山頂は真っ白ですが、大山は紅葉がまだ半分。季節が2ヶ月前に戻ったかのように夏が同居していました。

頂上から中国山地の山々が360度のパノラマで広がり、ブルーヘイズ（青い霧）に包まれた光景に、大感激！果てしなく広がる出雲の山と海の景色に、前日の緊張を解きほぐされる思いがしました。



下山は、5合目から行者谷別れの分岐を通して、大神山神社に出ました。山岳信仰の山として大事にされてきた山であることを、改めて実感しました。

映画

「狩人と犬、最後の旅」

(フランス・カナダ・ドイツ・スイス・イタリア合作)
ニコラス・ヴァニエ監督

カナダのローキー山脈で狩猟をしながら、妻と犬たちと自給自足の生活をしているノーマン・ウインター（本人）が主人公の映画です。

点下50度にもなる酷寒の大自然で狩りをします。すべての道具が手作り。電気も水道もない。現代にこんな生活があることに驚きます。ノーマンには、狩りを通じて生態系を調整し、大自然を守るという使命感と誇りがありました。

この大自然にも開発の手が伸び、森林伐採が進んでいました。また、安易な乱獲で野生動物が激減。ノーマンは愛犬たちと最後の旅に出ます。この犬たちが、氷に足を取られたり、行く手を阻まれたりと多くの危機を乗り越えて、ノーマンを助けるシーンが感動的。雄大で厳しい大自然を、私も一緒になって旅する臨場感を味わいました。



守る人がいなくなったら、この大自然は荒れてしまうのだろうかとその行く末が心配になりました。

「トンマッコルによろこそ」 韓国 パク・クァンヒョン監督

朝鮮戦争のさなか、自給自足の暮らしをする平和な村、トンマッコルという架空の村が舞台です。トンマッコルには「子どものように純粋な」という意味があるといえます。そこに飛行機が墜落して負傷した米国人パイロットが現れ、森に迷った韓国の脱走兵と、北朝鮮の兵士が出会い、最初は敵同士と警戒するが、武器を見たこともない、トンマッコルの人々と心通わせていくのです。

兵士が誤って手投げ弾を爆発させ、食料貯蔵庫が爆発。すると貯蔵していたトウモロコシがポップコーンとなって雪のように降ったり、巨大なイノシシと北と南の若い兵士がおとり役を引き受けたりと、村人の中に溶け込みます。この村のような平和こそがかけがえのないものだ気がつくのです。

でも戦争は続いていて、トンマッコルに対する総攻撃が始まります。南北の兵士は、トンマッコルの人々の平和を守るために力を合わせて戦います。



南北の統一には、程遠い状況ですが、個人と個人なら理解し合えるのではないかと監督の思いが伝わってきます。、もっと人間の純粋な心に触れ合うことの大切さを訴えて、民族の統一や平和を願う気持ちに胸が熱くなりました。

ラストは悲しいけれど、南北の兵士の友情に感動しました。

「ユア・マイ・サンシャイン」 韓国 パク・チンピョ監督

牛飼いのソクチュンは、コーヒー店に勤めるウナ（チャン・ドヨン）に一目ぼれ。ところがコーヒーの出前をして売春をしていました。事実を知りながら、ソクチュンは、生涯愛しぬく決意で結婚するのです。幸せは長くは続きません。たちの悪い元夫がウナにつきまとい、やむなく家を出て元の世界に。元夫の密告で逮捕されます。H I Vに感染しながら売春した罪で起訴されるのです。

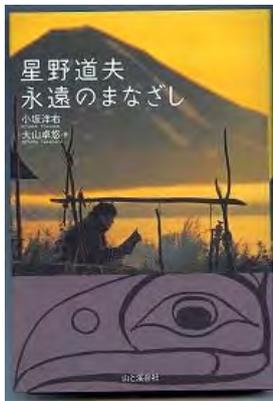
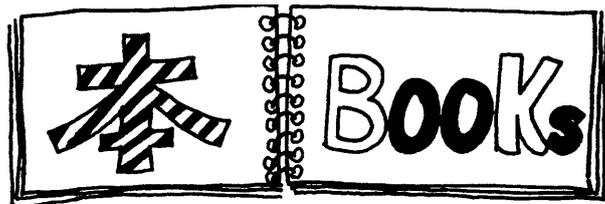


実話が元になった映画だとあります。絶望するウナ。ソクチュンは村八分にされ、家族はウナとの面会を許しません。ソクチュンは、ひたすらにウナを思い、留置場で再会しますが、ソクチュンは誤って飲んだ毒で声を失ってしまいました。「どうして何も言わないの？」と叫ぶウナに、声を振り絞って、ソクチュンは「どんなことがあってもウナを守るよ」と伝えるのでした。こんなに純粋に人を愛せるものだろうか？そのひたむきに圧倒されました。チョン・ドヨンは、韓国を代表する女優であり、この役を引き受けるまで、半年悩んだといえます。

しばらく日本映画では見かけないような純愛に爽やかな余韻が残りました。

「星野道夫 永遠のまなざし」

小坂洋右・大山卓悠著 山と溪谷社
1,700円



自然写真家の星野道夫さんは、1996年8月8日、カムチャッカ半島で、突然にこの世を去りました。43歳でした。

TBSの長期取材に参加中、テントの中で、ヒグマに襲われるというショッキングな事故が起きました。

クマの生態を誰よりも理解していた星野さんがなぜ？と思った人は多かったと思います。著者の一人である小坂洋右氏は北海道新聞記者として、事故に疑問を抱き、アラスカ在住の星野さんの友人である大山卓悠氏と共に、10年の歳月をかけて、事故の真相に迫っていきます。単なる不注意や油断だったのか？—その汚名をすすぐために二人は奔走します。その結果は自然を食べ物にした人間の愚かな行為があった事実をつきとめます。地元テレビ局のオーナーによって餌付けされたクマが事故を起こしたのです。

「永遠のまなざし」の章で、小坂氏は星野さんの未完の遺作「森と氷河と鯨」と「ノーザンライツ」で伝えたかったことは「目に見えないものに価値を置く社会」であり、平等と協調に重きを置き、分かち合いを旨とするコミュニティーだったのではないだろうか。星野道夫は今を生きる北方圏の人々の背後に、そうした価値観を見出し、過酷な自然環境に挑んできた先史モンゴロイドの姿をそこに重ね合わせていたのではなかったかと記しています。

どれほど、星野さんの写真と透徹したことばに心洗われたことかと改めて思いました。私は、絵本「クマよ」に映し出された自然とのんびり戯れている写真が好きです。

クマを愛し、畏れを抱いていた星野さん。人間の愚かな行為でクマを変質させたことへの怒りが静かに伝わってきます。

「僕の叔父さん 網野善彦」

中沢新一 集英社新書 660円

日本の歴史学に新たな視点を取り入れ、中世の意味を大きく転換させた偉大な歴史学者、網野善彦氏が逝きました。中沢新一の叔父であり、著者の幼い頃から、濃密な時間を共有してきたという。二人の知的な会話に思わず引き込まれてしまいました。

著者が「コミュニストの子供」として育ったことにも触れていて、「そういう子供時代を送ったことを不幸だったとっていない。それどころか、今ではそのことに誇りを感じているほどだと。」と記していて、著者の人間性とか、哲学に大きな影響を与えたことも理解でき面白かったです。

網野さんが実現しようとした歴史学とは、堂々たる自信をもって生きる非人。アイヌであり、イヌイトであり、真実の人間そのものである非人。世界に堂々たる非人を取り戻し、狭い人間からの解放であったことも知り、網野氏の著書にも触れてみたいと思いました。



「夕張岳よ永遠に愛を」

山影静子著 編集。印刷 坂井菊二郎

問い合わせ01235-5-2604

1927年生まれの山陰静子さんが今までに、こつこつと書きためてきた文章や、聞き書きなどを一冊の本にまとめたのが本書です。特に、聞き書きは、本人の息遣いが伝わるように臨場感あふれて、夕張の開拓の歴史をよみがえらせて見事です。率直なことばを聞き出せたのは、山影さんの人柄によるところが大きいと思いました。

戦前にアメリカから送られた「青い目の人形」にまつわる文章もあります。忌まわしい戦の中、北海道で生き延びた青い目の人形20数体が一堂に会した場に立ち合った感動が伝わってきました。

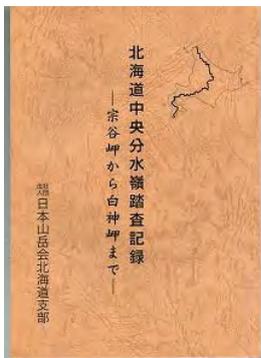
夕張市は破綻寸前。それでも夕張の歴史を伝える山影さんの存在は光っています。私の通信はまだ18年。まだまだたいしたことないなーと元気づけられました。



『日高の風—孤高の山岳画家—』の著者と坂本直行

「北海道中央分水嶺踏査記録—宗谷岬から白神岬まで—」

高澤光雄編 日本山岳会北海道支部 1,000円



1132km。太平洋と日本海に分ける北海道中央分水嶺は、宗谷岬から白神岬までの長大な距離です。

04年から06年4月まで、延べ201回、参加者は延968人に達しました。

私は、冬山の体験もテント泊の経験もありませんでしたが、山の大先輩たちの知恵と技術に支えられ、トータル110kmの踏査をザックの重みに耐えて、歩くことができました。

家族は、「大丈夫だろうか？危険はないの？」と不安な気持ちもあったと思います。毎週のように山に出かける私を、気持ちよく送りだしてくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。

立派な書評や新聞での紹介などありましたので、詳しいことは、是非、本書を読んでいただけたらと思います。私もたくさん執筆しています。

申し込みは樋口へFAX011-382-9020へ。

お便り

◆最近は何句、それに町内会新聞を編集。取材するようになってからは社会ものを集積していかなければ記事が書けないので、資料調査で図書館通いが多くなりました。「銀河通信」150号を目指し、読者層に伝えるべく多岐にわたって編集を心がけてください。

(札幌市 T・Mさん)

◆意欲、博識、行動力、体力他いっぱい。凄い凄い！(夕張市 Y・Sさん)

◆私も来春の3月、退職を考えています。やはり私らしく生きたくなりました。みな子さんが山、山、山なら私は畑、畑、畑、お料理です。一日中、台所に立てることが私の夢です。

(水海道市 M・Kさん)

素敵なリーフレットができました。

真駒内芸術の森緑の回廊基金 新田啓子さんからの案内です。

NPO法人真駒内芸術の森緑の回廊基金は札幌市南区でナショナルトラスト運動を行い、近郊の森を保全しています。

この度、植物写真家梅沢俊さん、野鳥写真家大橋弘一さん、動物写真家小原聡さんの写真協力を得て、新リーフレットを刊行しました。

「森へ、ようこそ」という表のキャッチコピーにもありますように、身近な森に行き自然に親しんでほしいという願いをこめて構成し、裏面にはオリジナルの真駒内～芸術の森の「緑の回廊MAP」を掲載しています。森を歩くのに便利のようにと遊歩道入り口、トイレ、コ



ンビニ、バス停等を表示し、森に生息している動植物のリストも掲載しています。

このリーフレットは環境プラザ・サポセン・エコネットワーク・みんたる等に置いています。また、置かせていただける場所を募集中です。事務局までご連絡ください。

(TEL/FAX: 011-582-1385 事務局新田)

m05kairou@almond.ocn.ne.jp

「NPO法人真駒内・芸術の森緑の回廊基金」

<http://www.community.sapporocdc.jp/comsup/kairokikin/>

購読料をありがとう10.5～11.27

森畑竜二(小樽市) 佐々木悦子(札幌市) 岩淵雅輝(江別市) 池田理恵子(札幌市) 安田成男(札幌市) 三野裕輝(札幌市) 市根井孝悦(函館市) 森武昭(狛江市) 栗城幸二(北見市) 八木健三(札幌市) 高野ケイ(札幌市) 梅沢俊・節子(札幌市) カンパも含めて 新妻徹(札幌市) 5,000円 山陰静子(夕張市) 3,000円 海川敏雄(函館市) 3,000円

総額25,500円は、印刷、送料に使わせていただきます。

また梅沢俊さんからは植物写真カレンダー、市根井孝悦さんからは山岳写真カレンダーを頂きました。あわせてありがとうございます。

購読料のお願い

今年最後の通信です。拙い通信にお付き合いいただきありがとうございます。20人の読者で始まった銀河通信は、現在、全国各地240人の読者にお届けしています。毎回37,000円から40,000円の印刷、送料がかかります。1,000円の購読料にご協力ください。振込み用紙は入れませんので、購読を中止される方はご連絡ください。山だけでなく多彩な話題を掲載していきたいと思っております。来年も引き続きご愛読いただけたら幸いです。

(みな子)